



知
の教科書

カバラ

Pinchas Giller

ピンカス・ギラー

中村圭志

訳





584

知の教科書 カバラー

ピンカス・ギラー^o
中村圭志 [訳]

発行者

鈴木 哲

発行所

株式会社講談社



東京都文京区音羽二丁目一二二一 〒一一二一八〇〇一

電話（編集部）〇三―三九四五―四九六三

（販売部）〇三―五三九五―五八一七

（業務部）〇三―五三九五―三六一五

ち きよう か しよ 知の教科書 カバラー

二〇一四年一〇月一〇日第一刷発行

装幀者

奥定泰之

本文データ制作

講談社デジタル製作部

本文印刷

信毎書籍印刷 株式会社

カバー・表紙印刷

半七写真印刷工業 株式会社

製本所

大口製本印刷 株式会社

著者

ピンカス・ギラー

訳者

なかむらけいし
中村圭志

© Keishi Nakamura 2014

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、学術図書第一出版部選書マッチエあてにお願いいたします。本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。図（日本複製権センター委託出版物）

ISBN978-4-06-258587-3 Printed in Japan

N.D.C.199 318p 19cm

目次

はじめに 3

第一章 カバラーとは何か 9

第二章 カバラーの歴史 25

第三章 カバラーの形而上学 71

第四章 ルーリアのカバラー 101

第五章 靈魂

131

第六章 神秘主義的實踐とミツヴオート

157

第七章 祈り

199

第八章 瞑想との関係

221

第九章 神の名

235

第一〇章 カバラーと現代のユダヤ教

247

索引	318	訳者あとがき	309
		文献一覧	299
		原注	279



584

知の教科書 カバラー

ピュカス・ギラー
中村圭志 [R]

Copyright©Pinchas Giller 2011

Japanese translation rights arranged with Bloomberg Publishing PLC
Through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

はじめに

「迷える人々の導き (Guides for the Perplexed)」[原著を含む英文叢書の副題] というシリーズタイトルの本は、本書にとっては皮肉なものである。というのは、これと同じ表題をもつ哲学者マイモニデスの著書は、書かれた当時からカバリストにとつての「鬼門」だったからである。「マイモニデスの合理的な哲学は、カバラー神秘主義の対極にあるものであった」。

だが、コンティニウム・プレス「原著の出版社」は、難しいテーマをわかりやすく解説した本のシリーズにこのタイトルを選び、このプロジェクトに支援を惜しまなかった。とくにトム・クリックとカースティ・シェーパー(彼は私を著者を選んだ)の尽力に感謝したい。

レーチエル・ブラット、ジョナサン・ブービス、ジョン・キャリア、ノスン・クレイン、ロン・ゴールドバーグ、ステイヴン・ヘンキン、ジョシユア・ジェーソン、ジェシカ・ケンドラー、シヨール・マギド、エリカ・ミラー、サラ・ニューマン、サラ・ミシエル・シュルマン、ハワード・ティルマン、スコット・ウェスル、エリオット・ウォルフソンは草稿を読み、コメントしてくれた。リック・レヴァインは入稿前の原稿を精読してくれた。カイル・シンガー、フランクスはセフィーロートの樹形図を描いてくれた。ガブリエル・ボトニックはケラレー・ハタラト・ヘ・ホフマーの難解な著作から図表を選んでくれた。もちろん誤記等があれば、それは著者ひとりの責任である。

ロサンゼルス、二〇一一年

ピンカス・ギラー

目次

はじめに 3

第一章 カバラーとは何か 9

第二章 カバラーの歴史 25

第三章 カバラーの形而上学 71

第四章 ルーリアのカバラー 101

第五章 霊魂

131

第六章 神秘主義的実践とミツヴオート

157

第七章 祈り

199

第八章 瞑想との関係

221

第九章 神の名

235

第一〇章 カバラと現代のユダヤ教

247

原注

279

文献一覧

299

訳者あとがき

309

索引

318

*
「」内は訳注である。

第一章

カバラーとは何か

1 ユダヤ教の形而上学

カバラとは伝統的ユダヤ教の「内なる」部分である「カバラはユダヤ教の伝統の異質な外部ではなく、むしろ伝統の内奥の形而上学を担っているという意味。以下の説明でその意味が明らかになる」。

カバラは、二〇〇〇年以上前から続く伝統である。それは何千もの書物とたくさんの運動、神秘主義者たちのサークルやコミュニティを生み出してきた。その全歴史を通じて、カバラはユダヤ教の宗教的実践の文脈に、すなわちユダヤ教一般の法、伝統、伝承の枠内に、おさまっている。それはユダヤ教史における一個の勢力である。主に、ユダヤ教徒の意識における滋養の源泉という形で存在し続けている。

ユダヤ教の学術的研究者は、カバラを歴史的視点から論じる傾向がある。しかし、彼らの見方は、カバラを生活の中で生かそうとしている人々にとっては、結局のところ不満なものだ。なぜならカバラは、ユダヤ教という一個の宗教的伝統の内側にある緊張関係や動力学の中から誕生したものであるからだ。

カバラをユダヤ教の公認の形而上学と捉えると、わかりやすいだろう。目の前の現象の裏にあるさまざまな次元——論証することも、五感で検証することもできないような次元——が、ユダヤ教にもある。ここにかかわるのがカバラなのである。

このような次第で、カバラの直接のテーマは、靈魂、死後の生、天と黄泉よみの構造、世界の創造、終末の出来事となっている。こうしたテーマをめぐる問いに答えるために、あれこれのカバラ的存

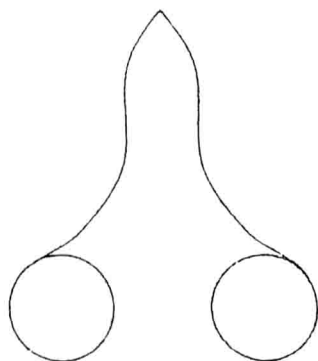


図1.1 「第三の目」(『セーフエル・イエツィラー』の伝統的な注解書より)

在の力と知識に与ろうとする、膨大にして複雑な伝承や習慣が生まれたのだ。

ほとんどの宗教は、こうした思想を主流の伝統の一部としてもっている。たとえばキリスト教には形而上学がたつぷりとあり、基本的信条の一部をなしている。カトリックの子弟は、靈魂を段階的に教育され、死後の生、その報いと処罰のイメージを教え込まれる。ペンテコステ派には、メシア再臨時の出来事についての詳しい神話がある。それはヨハネの黙示録を拡大解釈したものであり、炎の川、多頭の獣、不信仰者の処罰、信仰者の「歓喜」といった要素をもっている。ヒンドゥー教や仏教には、靈魂の来歴についてのゆるぎない教説、とくに業ごうに関する教説がある。罪を犯せば、その業によって次の転生が悪しきものとなる。

ユダヤ社会の慣行と思想は、こうしたテーマに関して無頓着であるように見える。ユダヤ教の哲学者は、他の宗教にあるような形而上学的システムには批判的であった。そうしたシステムは、レベルの低い精神性の表れ、願望充足の文化、神の報酬をだしにした道徳にすぎないと彼らは見なした。

ユダヤ教は「この世」志向的である。それは、諸々のミツヴァー(複数ミツヴォート)「戒律」を通じての行為に力点を置く。そうした行為が大いなる美德とされているのである。ユダヤ教が概ね、神から報いを得ることよりも、個々人の行動と責任にかかわるものであることは、多くのユダヤ人にとって誇りの源泉ともなっている。ユダヤ教徒の多くは、